

登場人物の行動の理由を想像し、『素敵なところを伝える手紙』を書こう

授業者 廣田 健生

1 本実践の教材について

(1) 作品の特徴と指導事項～行動の理由を読むことで、この作品はより味わい深く読める～

本教材「たぬきの糸車」は、岸なみ氏によって書かれた昔話である。伊豆の民話が基になっており、教科書に掲載される際に民話から昔話へと書き直されている。その過程で、民話では語られていたことが大幅に省略されており、空所が多く想像の余白が残されている作品となった。特に、民話では三人称全知視点で書かれており、おかみさんとたぬきの行動の理由が具体的に書かれていた。しかし、教科書では三人称限定視点でおかみさんに寄り添う形で書き直されている。その結果、たぬきの行動の理由（なぜたぬきはいたずらをしにくるのか等）は省略され、その理由を考えることにたのしさを感じられる作品になっている。また、中心人物であるおかみさんに目を向けても、「たぬきのことをどんな思いで見ていたのか」等は語られず、おかみさんの気持ちや行動の理由を想像することにもたのしさを感じられるだろう。このことから、人物の行動の理由を考えながら読むことは、この物語をよりたのしく味わう一つのきっかけになると考えられる。そこで、読むことの「エ 場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像する」を指導事項として設定し、行動の理由を考える見方・考え方を働かせながら作品を味わうおもしろさを感じてほしいという願いをもち単元を構想する。

(2) 子どもたちの実態と言語活動～素敵なところを伝える手紙とホットシーティング～

本学級の子どもたちは、これまでに「はなのみち」と「おおきなかぶ」の二つの作品に出会ってきた。その学習では、劇遊びをするなかで登場人物の表情や動き、物語世界の空間を具体的に想像しながら作品をたのしむ姿が見られた。しかし、その一方で即興的な表現をたのしむだけにとどまってしまい、自ら登場人物の行動に問い合わせをもち、立ち止まって考えている姿は少なかった。

こうした実態の子どもたちに「たぬきの糸車」を出合わせる。子どもたちは作品を一読した後「踊りながら帰るたぬきが可愛かった。」や「たぬきを逃がしたおかみさんが優しかった。」という思いをもつだろう。そこで、自分が感じた「たぬきの糸車のすてきなところ」を手紙に書いて実習生に伝えるという言語活動を子どもたちに提案する。子どもたちは、素敵なところを思い思いに手紙に書いていく。しかし、最初の手紙には素敵なところだけが書かれ、素敵だと思った理由やたぬきやおかみさんの行動の理由は書かれないことが予想される。そして、子どもたちに実習生から「素敵なところの理由を知りたい」「たぬきやおかみさんの気持ちが知りたい」という手紙が届く。その手紙をきっかけに、たぬきの糸車の素敵なところがもっと伝わるためにはどうすればいいかを考え、「たぬきやおかみさんがしたことの理由を書く」「たぬきやおかみさんの気持ちを書く」という視点を言語活動に追加していく。作品の素敵なところを伝えるという活動をきっかけとして、登場人物の行動の理由に立ち止まる姿を目指す。また、登場人物の行動の理由を考える手段として、本実践では「ホットシーティング」を設定する。ホットシーティングの場では、登場人物になりきって身体表現をしてみたりインタビューをし合ったりしながら行動の理由を想像していく。そして、想像した理由を基に、もう一度実習生に手紙を書くことで表現と理解を行ったり来たりしながら学んでいく姿が見られるだろう。

2 単元の構想

今回の実践では、次の2点をポイントとして単元を構想する。

- たぬきの糸車の『素敵なところを伝える手紙』と行動の理由を想像する場であるホットシーティングを組み合わせることで、たぬきやおかみさんの行動の理由をインタビューしながら想像し、想像したことを手紙に表すという表現と理解の相互循環を生み出す。
- 一時間の中では、全体の課題になっている場面を劇化したりすることで「内容の見える化」を行い、それぞれのホットシーティングの場に生かせるようにする。

3 研究の視点に沿った具体的取り組み

(1) 「表現と理解の相互循環」を促す言語活動の枠組みのデザインと学習過程の工夫

本実践では『素敵なところを伝える手紙』と『ホットシーティング』を組み合わせた言語活動をデザインする。『素敵なところを伝える手紙』は実習生に対して送るようにし（相手意識）、素敵なところを伝えるために（目的意識）、たぬきやおかみさんの行動の理由を書く（評価意識）ようにする。そして、ホットシーティングでは、たぬきやおかみさんになりきって劇化したりインタビューをし合ったりしながら行動の理由を想像していく（方法・手段意識）。

手紙に素敵なところを書くためにホットシーティングの場で登場人物になりきって想像し、想像したことを基に自分の解釈を手紙に書く。そして、その解釈のずれや行動の理由が想像できなかつたという困り事からもう一度なりきって想像するという表現と理解の相互循環を生み出していく。

(2) 言葉による見方・考え方を働きかせ「表現と理解の相互循環」を活性化させる対話の手立て

子どもたちは行動の理由を登場人物になりきりホットシーティングの場で想像していく。しかし、ホットシーティングという活動は初めての活動でもあり、発達段階的にも難しく感じることも考えられる。想像ではなく空想の世界で考えてしまう子どももいるかもしれない。そこで、一時間の中では、「内容の見える化」を全体で行い、ホットシーティングの場に生かせるようにする。桂（2018）は「内容の見える化を行うことで視覚的な手掛かりにより言葉への着目を促すことができる」と述べている。全体の場で、叙述を基に劇化等をしながら場面の様子を具体的にしていくことで、ホットシーティングの場に戻った際にも「だって、山のようになががつんであったんだよ。だから・・」のように見える化した叙述が根拠となり、言葉に立ち止まった見方・考え方を働きかせた対話が行われる。

(3) 学びの自覚化と自己の学びの調整を促す言語活動と学習評価の在り方

本実践では『手紙』を振り返りの媒体としても位置付ける。子どもたちはホットシーティングの中で、登場人物になりきり活動をしている。しかし、なりきるだけではその時間に分かったことや疑問を自覚することは難しい。「今日は劇が楽しかったよ。」のような活動だけを振り返ることも考えられる。そこで、振り返りに手紙を活用することで、素敵なところを実習生に伝えるために「今日は○○が分かったよ」のように学習内容にフォーカスした振り返りが書かれるだろう。そして、実習生から返ってきた手紙によって、自分たちの学びを自覚化できると考えられる。また、まだ想像ができない子どもには、担任宛に「まだ○○が分からない。もっと考えたい。」というような疑問や困り事を書けるような手紙も準備する。実習生に手紙を書くのか担任に手紙を書くのかを選ぶことも、自分の学びの自覚化を促す手助けになるだろう。